慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	つれづれの思い出
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2012
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.85, No.5 (2012. 5) ,p.72- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 並木和夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20120528-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かっただろうと思う。しかし、並木さん流のダンディズムだったのだろうか、愚痴めいたことは話されなかった。心からご冥福をお祈りいたします。

法学部教授　山　本　爲三郎

つれづれの思い出

同僚の死というのは、やはりこたえるものである。並木さんの訃報に接したのは、二〇一一年の年明けだったが、亡くなられたのは二〇一〇年末だった。その前年の二〇〇九年一〇月には、文学部教授で私と同じ分野（都市・地域社会学）の藤田弘夫教授も亡くなられた。法律学科の並木さんとは、法学部への就職は私が一年後だったが、年齢は一緒の一九五三年生まれであった。就職や年齢が近いと、学務の仕事や役職でご一緒したり、留学の時期が近かったりと何かと交流が多いものである。亡くなられると、自然と法学部に就職したころのことを思い出す。高鳥正夫先生や伊東乾先生、石川忠雄先生や十時嚴周先生が学部の中枢にいらっしゃったころである。

並木さんは、長身でスマート、恰好が良い男性であったが、学生時代に「脳腫瘍」を患ったことがあるとお聞きして、人知れずご苦労があったのだなと思ったものである。性格は几帳面でまじめ、ある面では融通が利かな

いという面もあった。それでも、同僚はいろいろな面で愚痴を言ったり、励ましあったり、細かいところは忘れてしまったが、懐かしい思い出である。

あるとき、並木さんは通信教育部の科目試験監督で大分あたりに行った後、国東半島の石仏の写真を撮ってきた、と言っていた。私もそのような機会に旅をするのが好きなのだが、並木さんにもそのような趣味があったのだな、と思った。並木さんは、朝もやの中にかすかに見える「国東半島の石仏や磨崖仏」を撮影していたようである。並木さんは、日本各地の自然の風景を撮影していたのかもしれない。直接、それらの写真を見せてもらったわけではないが、きれいな写真だったのだろうと思う。

ここ十年くらいは、次第に並木さんの体調は優れなくなり、授業も休むようになって、休職状態に至ったようである。研究棟の一階やエレベーターの中などでお会いすることも少なくなっていった。以前は、エレベーターの中などでお会いすると、季節や天気の話題から始まって、大学の様子などいろいろな話題が出てきて、降りるチャンスを逸するほどであった。法学部法律学科、政治学科の教員の大半は、研究棟六階と七階に一人部屋の研究室を持っている。授業や研究会、会議などを除くと、ほとんどは、一人一人の研究室にこもっている。まるで、ホテルのような廊下と個室の連なりである。その意味で、一階の受付とネーム掲示板、メール・ボックスの部屋とエレベーター空間は、三田の教員にとっての「共有空間」「公共空間」でもある。顔を見知っている法学部の教員たちの様子を知るのは、実はエレベーターに乗っているあの短い時間であったりする。並木さんのご様子にある種の変化を感じ始めたのも、私はあのエレベーターの中だったような気がする。

法学部の同僚、しかも同じ年の同僚を失うことは、本当にさびしい。元気で定年を迎えることを願うなど、就職した三〇年前には思いもよらなかったが、今では痛切に思うようになってしまった。われわれの研究・教育自体は、それぞれの個室で行われる行為のようなもので、同僚と交わることもほとんどない。しかし、廊下で、トイレで、エレベーターでたまに会う同僚、職務上やらされる法学部の学務・雑事で出会う同僚たちとは、実は見えない糸でつながっていて、普段意識しない「空気」のような存在でもある。失ってみると、その喪失の大きさに改めて、ぽっかり穴があいたような気がする。並木さんの喪失の後も、ある種の心の空洞を埋めることがで

きないでいる。

商法や法律学のことはわからないが、同じ仕事をしてきた同僚の一人を現役で失ったとき、法学部教授会として教授会の席で「黙禱」をささげたことは、印象に残っている。もちろん、時が人の命を追い越してゆくのは仕方がないことで、法学部もどんどん、世代交代を繰り返し、定年、名誉教授の鬼籍が増えていくが、それでも五〇代で亡くなった現職教授はめったにいない。私は、その意味でも並木さんのことを忘れないでいたい。並木和夫さん、安らかにお眠りください。合掌。

法学部教授　有　末　　賢

同期の友として

昨年一月七日、私は国立市にある並木和夫君の実家を訪れた。その直前の一二月三〇日に他界した並木君の霊前に手を合わせ、彼の冥福を祈るためである。一橋大学のキャンパスから少し入っただけの閑静な住宅街の一角に彼の生家はあった。彼の実の妹さんが出迎えてくださった。庭が広く、周りを緑に囲まれた立派な邸宅であった。並木君は、仲の良い妹さんとこの庭でよく遊んだのではないだろうか、そんな思いがそのとき去来した。

並木和夫君と私は同学年で、慶應義塾にも同期で採用された。昭和五六年、一九八一年のことである。この年に就職したのは、法学部ではわれわれ二人とフランス語の木俣章さんの三人である。並木君は法律学科で商法専門、私は政治学科だったので、大学院時代までわれわれのあいだに接点はほとんどなかった。ただ、並木君は当時法学研究科の大学院生にとっての唯一の投稿可能であった紀要の『法学研究科論文集』にほぼ毎年のように